

2024年8月4日 主日礼拝 聖餐礼拝 聖霊降臨節 第12主日

説教題：「**今の時を見分ける**」

聖書箇所：ルカによる福音書12章49 - 59節 (133頁)

説教者：秀島牧師 招詞：讚美歌93 - 1 - 50 交読文：イザヤ書30章23 - 26節 (1109頁)

讚美歌：83/561 (平和を求めて) / 441 (信仰をもて) / 81 (主の食卓を囲み) / 27

「今週の聖句」〔…このように空や地の模様を見分けることは知っているのに、どうして今の時を見分けることを知らないのか。〕

(ルカ伝12:56)

「牧師室の窓」 「鎌倉の墓所に納めし戦死せる叔父の遺骨は石ただ一つ」

「十八で太平洋の海戦に骸(むくろ)沈めしガダルカナル島遙か」

(1)皆様おはようございます。今日の聖書箇所はルカによる福音書の49節～59節までの箇所です。

小さな見出し(小見出し)が3つあり、「**分裂をもたらす／時を見分ける／訴える人と仲直りする**」と書かれている箇所です。昨年の8月から始めました「ルカによる福音書」の講解説教は、1年を要して12章を終わろうとしています。ルカ福音書は全部で24章まであります。その中で「節」の数が最も多いのは第1章で、1節～80節まであります。第1章はマリアの受胎告知、マリアの讚歌、洗礼者ヨハネの誕生が書かれています。2番目に節が多いのは22章で71節あります。22章は最後の晩餐、オリーブ山でのイエス様の祈り、イエス様が逮捕される場面が描かれています。そして、3番目に節が多いのが今回対象としている12章で、59節あります。この12章は今回まで4回に分けての講解説教です。

新約聖書の4つの福音書は、当然のことながら、夫々に章や節の数が異なります。この夏の期間に、夏の思い出として、冷たいお茶を飲みながら夫々の章や節の数をノートに書いてみては如何でしょうか。例えば、ルカ福音書の1章は80節あり、2章は52節あると書く、一種の地図作りです。

すると、秋以降冬になっても、今日の礼拝の聖書箇所は何処であるのかが立体的に見えてきます。この地図作りの作業はきっと記憶に残る夏になることと思います。教会の礼拝でも、自宅でも、聖書を読むには、春夏秋冬のアクセントをつけることが大切です。

(2)前置きが長くなりました。今日の聖書箇所のうちの最初の場面は、聖書の御言葉とは思えない文字が並んでいます。〔(12:49)わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。〕そして〔(12:51)あなたがたは、わたしが地上に平和をもたらすために来たと思うのか。そうではない。言っておくが、むしろ分裂だ。〕あれ、変ですね。ルカ伝2章で羊飼いたちの前に現れた主の天使は〔(2:10)…大きな喜びを与える〕〔(2:14)…地には平和、御心に適う人にあれ〕と書かれている言葉と全く異なっています。そして、〔(12:53)父は子と、子は父と、母は娘と、娘は母と、しゅうとめは嫁と、嫁はしゅうとめと、対立して分かれる。〕これは聞くに堪えない言葉ですね。この箇所は幾つかの注解書を読んでも明確には書かれていません。では、きょうの聖書箇所をどの様に理解したらよいのでしょうか。そのポイントは50節〔(12:50)しかし、わたしには受けねばならない洗礼がある。それが終わるまで、わたしはどんなに苦しむことだろう。〕この言葉、ここに書かれている「**洗礼**」とは、バプテスマの「**洗礼**」ではなく、イエス様が十字架の上で命を失われることを示しています。そして、〔(12:53)父は子と、子は父と、母は娘と、娘は母と…〕の言葉は、旧約聖書ミカ書7章6節の言葉を引用しています。ミカ書は旧約聖書の十二小預言書の1つで、今から約2千7百年前、北イスラエル王国がアッシリア帝国によって滅亡する直

前の時代、イザヤ書の第1イザヤとほぼ同時代の人ミカが語った言葉として伝えています。ミカは貧しい農民の出身です。支配階級による社会的不正・不正義によって人々は苦しみ、王国は神の審判を受けると預言しています。ミカ書はあのピノキオの様にクジラに飲み込まれたヨナの物語、ヨナ書の次に綴られている12の小さな預言書(十二小預言書)の1つです。

(3)併し、このミカ書をよく見ますと、6節には〔(ミカ書7:6)息子は父を侮り、娘は母に、嫁はしゅうとめに立ち向かう。人の敵はその家の者だ。〕と書かれています。続く7節には〔(7:7)しかし、わたしは主を仰ぎ、わが救いの神を待つ。わが神は、わたしの願いを聞かれる。〕と書かれています。そして、ミカ書の終わりである7章18節19節には〔(7:18)あなたのような神がほかにあろうか、咎を除き、罪を赦される神が。神は御自分の嗣業の民の残りの者に、いつまでも怒りを保たれることはない、神は慈しみを喜ばれるゆえに。(7:19)主は再び我らを憐れみ、我らの咎を抑え、すべての罪を海の深みに投げ込まれる。〕と書かれています。つまり、ミカ書には家族内での争いを主なる神の憐れみにより、平安が与えられることを示しているのです。

このように、初めは混乱と思われる状況が平安へと導かれるのは、皆様よくご存じの詩編22編(主は羊飼いの詩編第23編の一つ手前の詩編です)そこには、「(詩編22:2)わたしの神よ、わたしの神よ、なぜわたしをお見捨てになるのか」と言う嘆きの言葉が「主の恵みを讃える」言葉へと変化します。イエス様は十字架の上での命果てるその時に〔(マタイ27:46)わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになるのですか〕と言われました。この言葉は神を呪う恨む言葉ではなく、神への信頼を語る言葉とされています。

つまり、ルカ福音書の今日のこの聖書箇所は「分裂をもたらす」言葉ではなく、神の恵みの信頼へと変化する・転換することを示していると考えられます。では何故この様に舌足らずの表現になったのでしょうか。私が推測するには、初代教会が幾多の困難の時代に、福音書として文書化される以前には、口伝を繰り返す過程の中で、言わずもがなで当然に理解できるであろうことは省略して語り継がれたのだと考えられます。極々平易な事例で申し上げますと、北陸地方や中国山地では、以前にも申し上げましたが、「弁当忘れても傘忘れるな」と言う、諺(ことわざ)、いや鉄則があります。山の中でのきつい仕事には、体力を回復するための弁当・食べ物は大切ですが、突然に降ってくる冷たい雨に濡れてしまうと、命を落としてしまうのです。表面的な正しさよりも、更に深い真実があることをこの諺は教えています。私がその地方で働いていた信徒時代に教えられ、今でも大切にしています。「弁当忘れても傘忘れるな！」物事の本質を見誤ってはならない、翻って、聖書の御言葉にしっかりと耳を傾けることに繋がると私は理解しています。

(4)続いて、小見出して「時を見分ける」と書かれている54節~56節を見てみましょう。雲の動き、風の動きから天候の変化を予測する、読み取ると言うのです。まさに「傘忘れるな」ですね。エルサレムの場所は(北緯約32度ですから、日本の宮崎市や鹿児島市とほぼ同じ緯度にあり)地中海から吹き抜けてくる風の影響を受ける場所です。また、標高約8百メートルの山地の頂上にあリ、日本の比叡山や高野山と標高がほぼ同じくらいで天候が変化し易いのです。従って、56節に書かれている様に、人々は「空や地の模様を見分けることは知っていた」のでしょう。併し、イエス様は人々を叱って「どうして今の時を見分けることを知らないのか」と言われました。

ここに「今の時」と書かれています。皆様もご存じのように、時・時間と言う言葉のギリシャ語には2つあります。1つは「クロノス」と言ひまして、一定の長さの時間や時期を示す言葉です。もう1つは「カイロス」と言ひまして、「特別の時期・まさにその時」と言う意味での時です。事例としては、マタイ伝の13章の「種を蒔く人」の譬え話には〔(マタイ13:30)刈り入れの時〕と書かれており、マルコ伝の1章には〔(マルコ1:15)時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。〕があります。まさに「神の国が近づき、福音を信じる時」なのです。

私たちクリスチャンは洗礼を受けることによって、主の来られる時、再臨の時を信じるようになります。併し、間違えてはならないのは、「その時がいつ来るのか」と言うことが重要なわけではありません。重要なことは、「神の国が既に来ており、私たちは神の国に生きている、主と共に生きている」と言うことを信じているのです。だからこそ、クリスチャンはこの世の中で主と共にしっかりと生きようとしているのです。

(5)ところで、56節に書かれている「今の時を見分ける力」と57節の「何が正しいかを…自分で判断する力」はいつの時代にも大切です。別の言葉に言い換えれば、「生きる力、生き抜く力」と言い換えることが出来るでしょう。しかし現代社会ではこの力は不足しているのではないのでしょうか。学校での勉学は大切です。そして、それよりも遥かに重要です。次世代を担う人たち、子供たちに、教会は教会の枠を超えて伝えて行くべき御言葉があります。「自分で判断する力」があれば、58節に書かれている様に、争っている人と「仲直りする」ことが出来るのです。

…不思議だとは思いませんか。今日の聖書箇所は「対立と分裂」から始まりましたが、いつの間にか、「仲直り・和解」への道筋になっているのです。

先程は旧約聖書のミカ書について申し上げましたが、ミカ書の4章3節には（旧約聖書の1453頁に）私たちが心を正して読むべき言葉があります。今日の「平和聖日」に相応しい言葉です。

〔（ミカ書4:3）主は多くの民の争いを裁き/はるか遠くまでも、強い国々を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし/槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず/もはや戦うことを学ばない。〕イザヤ書の第2章にも同じ言葉が書かれており、アメリカ・ニューヨークにある国際連合本部前の石碑に刻まれています。平和とは口で唱えれば実現できることではありません。指をくわえて待っていれば来てくれるものでもありません。

今日の聖書箇所の最後の節59節には〔（12:59）言うておくが、最後のレプトンを返すまで、決してそこから出ることはできない。〕と書かれています。1レプトン（口語訳聖書・文語訳聖書では1レプタ）は僅かな金額のお金です。私は就職して長く働きましたので、1円の大切さ、1ドルの大切さを骨の髄まで叩き込まれました。そして、お金以上に人間の価値、努力、能力、チームワークが大切なことを叩き込まれました。併し、困難を克服するためには努力や能力には限界があります。

その限界を支えてくれるのが聖書の御言葉であると思います。御国に行く日まで、主の御言葉と共にある日々を歩んで参りましょう。

・・・お祈りいたします。

イエス・キリストの主なる神様、きょう主の日の礼拝に招かれましてありがとうございます。

私たちが過ぐる1週間の日々をあなたの御心から離れておりましたことをお許してください。主の御言葉を得て、あなたと共に日々を過ごし、隣り人を支えて参りたいと思います。

主の平和を願いつつも、戦争の中に、戦乱の中にいる人々が多くいます。何と少しでも平和が実現します様に祈ります。自然災害の被災地の人々のために、その地区の教会のために祈ります。この教会に連なる一人ひとりのため、皆様の心の中にある教会に連なる方々のために、病気や悩みがあるひとりひとりが少しでも和らぎます様にと祈ります。

夫々の人生で悩みの中にある時に、「今の時を見分ける」知恵と勇気が与えられます様に。

私たちの救い主イエス・キリストの御名によって祈ります。 アーメン